

世界文学紀行の講座を始めました

定年後にスペインのマラガ大学に留学した後、私は世界の名作の舞台を訪ねる紀行を続けてきました。現役だった特派員時代に身につけた文を書く力と外国語（英語とスペイン語）を活かしたいとの思いからでした。

幸い老夫婦二人、贅沢をしなければ年金でなんとか生活していけそうだったので、取材費のカバーのために駅前の自転車整理の仕事を初めなんでも働きました。ときどき書いた記事や写真が新聞や雑誌に採用され原稿料なるものが入ることもありましたが、かかった費用の半分にも届きません。それでも飛行機は格安便を使い、ホテルも三つ星以下を探し10年間に15作品の舞台を訪ねることができたのでした。

まとめた原稿や写真はホームページに掲載し、講師の研修集団であるシニア大楽の紹介で都内あるいは近県でときどき講演もしてきましたが、全体を総括するという機会はありませんでした。そこで、80代に入った自分の年齢も考え、紀行総括の最後の機会と思い地元のアキシマエンシスで「世界文学を学ぶ会」を立ち上げ、4月からパワーポイントで写真を紹介しながらの講演をしようとしているところです。

月に1回2時間で計12回、取り上げる作品は：

「ドン・キホーテ」（スペイン）「風と共に去りぬ」（アメリカ）「赤毛のアン」（カナダ）「ロミオとジュリエット」（イタリア）「ハムレット」（デンマーク）「車輪の下」（ドイツ）「戦争と平和」（ロシア・モスクワ）「罪と罰」（ロシア・サンクトペテルブルグ）「レ・ミゼラブル」（フランス）「アンデルセンとグリム兄弟の作品」（デンマークとドイツ）それに「ナイル川紀行」（エジプト）「ライン川紀行」（ドイツ）の予定です。

第1回はセルバンテスの『ドン・キホーテ』。400年前、槍を掲げ愛馬ロシナンテに乗っていたスペインのドン・キホーテに対して、私め、現代の東京のドン・キホーテは、槍の代わりにカメラを掲げ、馬の代わりに飛行機に乗って“見果てぬ夢”に向かいて世界文学の旅を続けてきた次第です。



セルバンテスは58歳のとき前編を、68歳のときに後編を出版しました。5年前の2016年は亡くなってから400年という区切りの年でした、奇しくも亡くなった年がシェイクスピアと同じだったので、この年の昭島稲門会の総会の際には「没後400年：シェイクスピアとセルバンテス」とのテーマで講演をさせていただきました。

小説『ドン・キホーテ』でもっとも有名なくだりは、主人公のドン・キホーテが遠くに見える風車を邪悪な巨人と信じ込んで戦いを挑んだ場面でしょう。その有名な場面の舞台、ラ・マンチャを訪ねました。「ラ・マンチャ」とはアラビア語で「乾いた土地」、スペイン語で「しみ」という意味です。赤土の広大な平原でスペインのほぼ中心に位置し九州全土より少し広いといえます。



タクシーでカンポ・デ・クリプターナの風車の並ぶ丘に上りました。車から降りると風が冷たい。10基の風車が点在しています。今はどの風車も回っていません。かつては風力を利用し、粉ひきに活用していたものですが、今は完全に観光用と化していました。ドン・キホーテはこの風車を邪悪な巨人と信じ込んで戦いを挑んだのです。

あまりにも有名なシーン。作品の全部を知らない人でもここだけは知っている方も多いでしょう。正義を求め、悪と戦うために槍を抱えて風車に突進するドン・

キホーテは理想主義の典型であり、その従者サンチョ・パンサは物質主義の権化という人もいます。文中には二人の間の滑稽なやり取りや諺が頻繁に出てきます。二人の間でやりとりされる言葉は実に示唆に富んでいます。

ドン・キホーテもですが、サンチョ・パンサの言葉もいい。

「人間寝てえるうちは、身分の高え者も低い者も、貧乏人も金持ちもみんな同じでさ」
「この世を捨て、地の下へもぐる段になったら（死んで埋葬されたら、という意味ですね）、お大名も日雇もおんなじように窮屈な途を歩くだし、法王様のからだも召使いのからだも、よしんば背たけに違いはあろうと、占める広さに変わりはない」（永田寛定訳）。

——そう、どんなに偉い人でも寝ていて畳2畳以上を独占することはできません。また、死んだらどんなに金持ちでも権力者であってもそれを来世に持って行くことはできません。みんな同じになる——人生の究極の真理ですよ。

猪突猛進のドン・キホーテと優柔不断なハムレット。これにゲーテのファーストを加えて、西欧文学の三大主人公と呼ぶ人もいます。セルバンテスが没したのは奇しくも「ハムレット」の作者シェイクスピアと同じ1616年でした。シェイクスピアの作品が近代英文学の原点となったように、セルバンテスの作品は近代スペイン文学の原点ともなり、聖書に次いで世界で多くの言語に翻訳されているようです。

ミュージカル「ラ・マンチャの男」でドン・キホーテがつぶやいています。

「人生自体が狂気じみているとしたら、一体本当の狂気とは何だ、本当の狂気とは。夢に溺れて現実を見ないのも狂気かも知れぬ。現実のみを追って夢を持たぬのも狂気だ。だが一番憎むべき狂気とは、あるがままの人生に折り合いをつけて、あるべき姿のために戦わないことだ」

——夢を持つことの大切さ。また、周囲にどう見られているか、などを気にして自分の信念の道を進まない生き方を鋭く突いています。

ドン・キホーテのことを“年老いた気が狂った爺さん”と見る人もいます。でも私には“理想を求めて進む勇敢な爺さん”のようにも写ります、滑稽な冒険譚もさることながら、狂気と言われながら、悪を懲らしめ、正義を求め、夢に向かって進む主人公の姿に惹かれるものがあるのです。（上記の二人の言葉は講演原稿からの引用です。詳しくは4月下旬に載る予定の「講演会のスピーチ」をご覧ください）

